

1. 今年の研究テーマ：小・中連携の構想づくり

2. 研究テーマへの思いと10月までの取り組み

秋田市の教育施策の中では、「小中一貫した考えに立った教育の充実 9年間の発達段階を考慮し、連続性のある教育の充実を 」が掲げられている。9年間を一つのまとまりとしてとらえ、小学校から中学校へ一貫した考え方に基づく教育を展開するためには、小中学校の連携が必要となる。

小中学校の間で人事交流がありながら、質的な面では小中のお互いが影響し合う機会は少なかった。子ども自身がいただく中学校のイメージは、勉強が難しくなり高校入試があること、部活動で鍛えられること、生徒指導面で小学校よりもきまりに関する事項が多いことなど、楽しいはずの学校生活に高いハードル課せられるという印象が強かったのではないが。学童期の常識が通用しなくなり、「自立」すること自体に耐えられるかという不安があったように思う。

これまでも岩見三内小学校と岩見三内中学校では、伝統的に運動会を一緒に実施してきた。また、両校のPTAが合体して岩見三内地区PTA連合会を組織している。

これらを土台として、よりいっそう時代の要求にこたえるにはどうすればよいか、実践的には何ができるのか、という点に関心をもち、個人テーマに選んだ。

情報を共有し、小中が一体となって教育活動に取り組むには、お互いが行き来する機会を設けることが先決である。

申告目標を「小中連携の基本的な構想をまとめる」としたものの、教育課程の異なる双方ができることを考える段階では「思いつき」の域を出ることができなかった。

具体的な手立ては 児童と生徒との交流の場の設定、 教師間の情報交流の実施、 働くことの意義を児童に考えさせる実践の促進の3点とした。

については、1月の中学校体験入学までその機会がなく、問題を簡単にとらえたことを深く反省している。中学校と連絡を取り合い、6年生の質問に中学校1年生が答えるという流れは、今後も大切にしていきたい。授業参観の在り方も中学校との連携により、2グループに分かれた授業を体験してきた。児童の中学校生活に対するイメージが前年度よりもよくなったことを強く念じている。

については、中学校の協力により、互いの授業研究会に招待し合い、授業を見るだけでなく、研究協議にも加わることで教職員の小中連携への意識が高まりつつある。自分たちが送り出した子どもについて語る、という意識まで高まることが次年度の課題であると思う。

については、中学校でよく行われている職場体験から着想した。ただし、小学校では総合的な学習の時間に行われている地域めぐりや探検、二分の一人式などとの関係を十分に吟味していなかった。各学級で行われている「働くことの意義を考えさせる」実践は、「生き方指導」の視点に立った進路指導の一環をなしていることを研修を通じて知った。

穏やかに小中連携が推進されるよう、今後も中学校との連絡を密にして秋田市の教育課題への取り組みが児童に生きて働く力となることを念じている。